

大陸（中支）

今日を想う

石川県 石崎 皓 三

私は大正九（一九二〇）年五月、石川県に生まれました。私の軍歴を記しますと、昭和十五（一九四〇）年十二月、第二十一師団歩兵第八十三連隊通信隊に入隊。昭和十六年三月、徐州にて第一期検閲を終了し、そして中原会戦、その他北支各作戦に参加しました。

昭和十七年三月には保定幹部候補生隊を卒業して北部仏印に駐屯していた原隊に復帰しました。その後、独立第二十一旅団通信隊に転属となり、部隊はサイゴンを経てラバウルに転進となり、ニューギニア作戦に参加しましたが壊滅状態となって現地解散となりました

た。そしてラバウルより南海第三守備隊に転属となり、ウェーク島（大鳥島）より昭和二十年十月復員してきました。

私の戦争の体験は、私の軍歴でも記しましたように、四年八カ月の間戦場におりましたので、それなりの体験はありますが、その頃の若い者には、この軍歴の体験というものは労苦だったと思わない、当然やるべきものをやってきたという考え方しか持っておりませんでした。

私が子供の時に日露戦争に行ってきたという人がおりました。私はその人に大変畏敬の念を持っておりました。「あの人は日露戦争に行ってきたんだ」と。そのころ戦争に行った人というのは非常に少く、私の親父は「あの人は戦争に行っただが、将校の馬丁とし

て行ったので馬を持って一緒にいたのだ。実際には戦闘はやっておらんだろう」と言っておりましたが、それはどうであらうと「あの人は戦争に行ってきたんだ」と、私はいつも尊敬するような目でその人に接していたものです。

ところが、この大東亜戦争では行かない人の方が少ないくらいで、ほとんど皆行っております。その人たちが帰って来てから、その人たちは戦争の話をあまりしない、したがらない。そのような話ができるような戦意ではなかったのだと思います。そのような「戦争体験を語り継ぐ」ということ、そして「語り合える」ことが、もう三十年くらい早く出来ておれば、もっと戦争体験というものを歴史の中に織り込むことができたのではないかと思えます。

私は陸軍に入隊し、第六期幹部候補生でした。その前には外地の学校におり、徴兵延期が出来ないまま軍隊に入りました。戦後いろんな人がおりました。「俺は戦地で人の首を切った」とか、「白兵戦に出た」と

か、しまいには「強姦をした」ということをあたかも自分が、あるいは部隊全体がやったように言って、本などに掲載したり、あるいは新聞に書かせたりと、残念ながらこのような人もおりました。

戦争といいますが、戦争の中で我々の出ているのは本当は局地的な部分的な戦闘の連続です。私も軍歴に書きましたように「中原会戦」という作戦に参加しました。

この会戦には私は初年兵の時に参加したのですが、会戦に出て野営をやりました。ところが夜、パパンパパンと撃たれました。靴を履いて、背のうを枕にして、剣とかは外して寝ておりましたが、我々は真つ暗闇の中を急いで剣を着け、銃を持って外へ出ました。これが初めての弾の下でしたけれども、兵隊というのは自分のごく狭い範囲のことしか分かりません。どこから弾がくるのか分かりませんが、とにかくヒューヒューと音がする。ガタガタ震えて歯の根が合わないというのはああいうことだと思えます。ところが上官が後ろにいて「お前ら何をやっている。あれは味方の弾では

ないか」と。こちらから撃っているのと敵の撃つ弾と見分けがつかない始末でした。

陸軍歩兵では、分隊長が一五〇―一六〇人の兵を連れてやって来ます。小隊長が四〇―五〇人、中隊長は二〇〇人くらいを指揮することになっています。要するにだんだんと上にゆくほど広く展開した戦闘に参加し、全体の状況が分かってゆくこととなります。

従ってここで私が書きますのも戦争のごく一部でしかありません。

私は四年八カ月戦地におりました。しかし一発も弾は撃っておりません。それは私は通信だからで、通信は弾を撃たない、通信が弾を撃つようになったら最後です。従って撃たれてばかりおりました。一番最初に撃たれたのは先程の夜襲を受けた時です。どこから弾が来るか分からない。

弾の音というのは笛が鳴るように「ヒューヒュー」とくるのは相当遠いのです。だんだん弾が近づいてくると「シュッシュッ」となります。しかしそれでも離

れていて、いよいよすぐ近くになるとそういう音はしません。その辺の地面に落ちる「ブスブス」というようになります。このような数多い経験を経て、撃たれる体験というものは全部一通り体験させられました。

中国戦線では当時中国兵はチェコという軽機関銃をもっておりました。それから擲弾筒があります。手榴弾があります。中国の支那軍の持っている手榴弾というのは日本のとは異なり柄の付いたもので、それを投げてくるのにも遣いました。擲弾筒攻撃にも遣いました。このようないろんな攻撃を受けたのですが、四年八カ月の中の最後のウェーク島ではボーイングB17・24の攻撃を受け、しまいには艦砲射撃も受けました。艦砲射撃というのは、軍艦が並んで陸地向け撃つのですが、照準を一定にして変えなくてもよく、艦が走りつつ撃てば島に当たるといふ訳です。私は通信ですから「第〇中隊前へ！ 第△中隊前へ！」と、次はここだなというのが分かります。あまりいい気持ちはしないものでした。

戦地へ行く前に私は北京におりました。私の塾頭が「お前な、戦争というのは決死の覚悟とよく言うけれど、決死の覚悟とは五分間ぐらいしかないんだ」という話でした。その人は陸士第一期生で宇垣一成と同期の寺西という先生ですが、日露戦争に出ており、辛亥革命にも参加しており、その体験から、そんなことを中されました。そのころの戦闘はそんなことでよかつたのかもしれない。

第八十三連隊に山王という中佐がおりました。その人が部隊を引き連れて山東省方面へ討伐に出て行きますと、今まで周囲から撃っていたのがピタリと止んでしまい、敵が誰もいなくなり、さらに山王中佐が馬に乗って行くと、その部落「歓迎 山王大人」と書いてあったそうです。「また何応欽にやられた」とは山王中佐の弁。何將軍は山王中佐と日本の陸士の同期生であったので、山王が出てきたら山王に華を持たせて引き揚げていき、いなくなるとまた出てくるというような、「楽しい戦」もやっていたのです。このような戦国時代とあまり変わらないような戦争もありました。

— こういうことを私は連隊にいる時に聞いたのですが、先程記しましたように、あらゆる弾の攻撃を受けた最後には、私たちの乗っていた輸送船が魚雷を受けて沈みました。一晩海で泳いでいて、翌朝まで十三時間平です。翌日助けられました。

中国戦線の時には連隊の通訳をやりました。幹部候補生の時です。通信隊というのは、とくに撤退するときには最後まで連隊本部にいますが、無線だけ残りました、これに一個分隊付けてくれました。それらが守ってくれて連隊内の大隊間の通信をやるのです。最後にこれも撤収して帰るのですが、守られているとは言え、後ろから敵はくるのですから心細い戦闘の時もありました。そして部隊の一番後尾について行き、その時「石崎候補生、前へ！」と一番先頭から申し送りしてきます。なぜかというところ部へ入る前に、その部落の住民と話をする通訳として呼ばれるのです。最後尾にいて、部隊が並んで行軍している横を走り貫いて先頭まで出るので、大変な距離を軍装したまま走

り、その部落と話し合いの通訳をします。

部隊が野営をするときはあまりないのですが、部落に入って休みますと食糧が要ります。米は持っているのですが米と缶詰だけでは駄目で、やはり兵隊に何か食べさせねばならないと、部隊から徴発に行くのですが、その時にも当然通訳に出ます。徴発とは、ただで取ってくるというのは大きな間違いで、徴発に行く時には金を持ってゆきます。それで鶏はいくら、豚いくらと金を渡すのです。大まかな価格は連隊本部から言ってきますが、こちらで決めます。こんな業務にも従事しました。

戦闘というのは、局地戦もそうでしょうが、ほとんど「運」、紙一重の間に生死の境があるのではなからうかと思えます。私は一番最初に第八十三連隊という連隊の通信隊に入り、予備士官学校は保定でした。戦地ですから予備士官学校とは言わないで幹部候補生隊と言いました。歩兵連隊の通信隊というのは有線小隊長と無線小隊長二人と中隊長の三人の将校がいるのですが、私が幹部候補生隊を出て元の連隊に復帰したと

ころが、当然「員数外」となります。私は見習士官で自分の隊へ戻りまして、初年兵の教育をやり終えた時に、別の独立混成第二十一旅団（ハノイ）の部隊へ転属となりました。

後に、その時無線小隊長だった滝田少尉（幹候五期生）というのがビルマへ行ったのですが、ビルマの飛行場へおりの途端に殺されてしまいました。その滝田少尉はビルマへ行く時に「行きたくない」と涙を流して言ったそうですが、やっぱり何かあったのかな、もしも私が転属せずにおれば、当然私がビルマへ行っただけであと、その運命を思いました。

独立混成第二十一旅団はサイゴンからさらに南へ移動することとなり、ニューギニア要員として海軍の船でサイゴンを出ました。サイゴンを出る二日ほど前に旅団通信の無線小隊長でありましたところが、仲間の電信隊出身の伊藤という少尉（一年志願兵）が出港する二日前に来ました。私は歩兵の連隊通信ですので大きい無線機は得手ではありません。ただ通信法についてはあまり変わりませんから、やるということになっ

ていたのですが、その伊藤少尉は「ようやく自分の落ち着ける部隊が見付かりました」と。そのときに伊藤少尉は私に小さな写真を見せて「これは私の娘です」と。セーラー服を着た女の子でした。私はその時に二十二歳、いや、こんな大きな娘さんがいて少尉はだいぶ歳かなと思った記憶があります。

サイゴンを出港して一日目はバラオに入りました。

翌日朝九時ごろ出て十二時ごろに敵の潜水艦の魚雷攻撃を受けて沈みました。その通信隊が乗っておる船は轟沈です。船の轟沈というのは、魚雷が船の真ん中に当たると、その船は大体真つ二つに折れ、そして両側が突っ立って沈むのです。

この伊藤少尉は着任四日間で戦死しました。あの時にあの人が部隊が分からないと言って来なかったら、私がああ船に乗っていたはずなのです。

この「運」によって、日本海海戦で東郷元帥（当時大将）が連合艦隊司令長官として大勝されたのですが、その東郷さんはそれまでは舞鶴鎮守府の長官をしておられました。その当時、舞鶴鎮守府の次は退官と

なり現役では舞鶴鎮守府が最後のポストであったのですが、その東郷舞鶴鎮守府長官を今からロシア艦隊を迎える連合艦隊司令長官に充当しようとい決められたのは山本権兵衛という当時の海軍大臣でした。

あの時の海戦に備えて、連合艦隊は日本海の荒波の中で砲撃の訓練をしていたため良い戦果を挙げられたのです。

「運」というのはそういうことを言うので、とくに戦地で弾の下で船がやられたり爆撃を受けたたりすると、こういうことをヒシヒシと感じました。

私は最後にはウェーク島に行きました。部隊はラバウルを出てからニューギニアへ行くはずだったので、先行部隊は途中で敵機の爆撃を受け、船の半分がちぎれてラバウルに帰ってきました。前部に乗っていたものは全部戦死です。我々も次に行く予定だったのですが船がなく、しまいには輸送船をやめて駆逐艦で行くのですが、それもまたやられるという中で、うまく着いたのがあります。最後に潜水艦輸送となりましたが、これには当時は一〜二人しか乗れませんでした。

した。

当時、私は旅団司令部の通信係で当然行くことになつていたのですが、ニューギニアの部隊からは後回しになつたのです。要するに小銃でも武器を持ったものをよこせ、通信の将校は拳銃くらいしか持つていないので戦力にならない、というわけでだんだん後回しになりました。

この間に私は Deng 熱という病気にかかり、最高は体温計でも測れないような熱で、四一・八度にもなりました。それでも体はしっかりしておりましたし、よく食べました。ニューギニアでの部隊は全滅で要をなさないといいことで現地復員しまして、私の部隊は解散です。解散といつても内地へ帰れというのではなくて、また別の部隊へ変わるのですが、その当時、ウェーク島に南海第三守備隊というのがありました。

このウェーク島は当時は大鳥島と呼称し、ハワイに一番近いところだと思ひます。終戦後、日本の飛行機がアメリカへ行く時に途中給油した島です。ウェーク

島は南方の熱帯地方といえども海は非常に冷たく夜が寒い。私は半袖半ズボンで行つたのですが寒かつたのですが兵隊にはちゃんとした服装をさせていたので彼らはあまり寒くなかつたようです。

そのウェーク島への途中で船がやられ、最後には四五人のグループになつたのですが、泳いでいたのは我々だけではないか、皆はどこかへ行つてしまつたのではないかと心配をしていました。船から海に飛び込んだ時に船を振り返つて見て、船が沈むまでの間に五〇メートル以上離れると我々は聞いていたし、兵隊にもそのように言つてきました。救命胴衣を着けないで入つたのですが、一生懸命船に直角の方向に泳ぎ、船から離れました。しばらくして船は二つに割れて沈みましたが、その時、皆寄つて「お前もおつたか」「お前もおつたか」というようなことで、軍歌なんかを歌つて互いに元氣をつけました。そういう時でも俺はここで死ぬんだということは全然考えないものです。なぜか分からないが不思議なものです。翌日、駆逐艦で助けられました。

ウエーク島では「餓死」ということが一般に言われました。餓死というのは栄養失調で亡くなるのですが、その栄養失調で亡くなる順番は、その兵隊たちの徴兵検査の合格した種類の順番を表していました。昔の兵隊検査では甲種合格、第一乙種、第二乙種それに丙種があり、大体第一乙種以下は兵役に採りませんでした。甲種合格でもクジはずれがあり、運がいいか悪いのか分かりませんが、クジにより軍隊に入るといのがあったのですが、だんだん兵員が足りなくなつて丙種まで入隊するようになりました。そしてウエーク島で減食され栄養失調になってきて最初に倒れて亡くなつていったのはその丙種合格の者たちでした。その次は第二乙種という具合で、甲種合格の者でも亡くなつた人もおりましたが残つた方でした。

ウエーク島の兵隊の数は、陸海軍合わせて六六〇〇人最後に残つたのは二二〇〇人ですが、八〇〇人が戦争末期に病院船で内地へ輸送されました。一二〇〇〜一三〇〇人が後に残りました。六六〇〇人のうち三三〇〇人が戦死、そのうち本当の戦死は六〇〇〇人くら

いです。後の二七〇〇人が餓死でした。

私はラバウルにいる時の体重は二〇貫（七五キロ）あつたのですが、それがウエーク島での最後の時には一三・五貫（五〇キロ）にまで減りました。ちよつとした石でもつまずいて転ぶ、手を太陽にかざすと手の骨が見える、そのくらいにまでなりました。

何とか「運」でもつてこうして生きてきたのですが、これからはそのお返しをしなくてはならないと考え、いま郷友会活動というのをやっております。

私の従軍記

入隊から中支戦線まで

長野県 中村 喜之助

「お前は外地部隊要員だから、すぐに外地へ行くようになるから、その心づもりで行け」と親戚の町役場兵事係に言われて郷里を後にし、昭和十五（一九四〇）年十二月十五日、宇都宮東部第三十六部隊へ入隊